

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

左平記式器説

伊勢平藏貞丈著

一、
折角回 右方の目貫の楕ん柱ハ左、世帯を以て古代の目

貫と考ふる處一今世の目貫ハ唯柄の上ふまゝに傍を

はらまゝにうくるこの宛ハ、別り竹行とさしゝりて成

目行といふに世帯古代ハまゝたきといふ古今著聞にも

見たり古代の目貫といふものハ右のとくある物に例

かひなくゆるなるこの宛とぬきあるとものあるは目貫と

いふ目とハあるのとは是も今世の目行の如しその目

行のとくあるものハ、既ふ多黙花をなすの形とゆるが

あり一方の目貫も、又一方の目貫ハ行ハ、長

筈と柄の宛ハ、一方も、又一方よりハ、かの

社が不後地伝りし
以後傳りたる也

中一打と云ふ一こそ重し今世祓禊目行と云ふのこし

これとも祓禊の小儀は唯すしこみ重し古代目貴と云ふ
物も今世の目行と目貴と云ふ小令を傳り付したる也

左の打刀のちと柄と云ふをこくをく小古代の目貴と云ふ柄
ぬきぬき事一付さるを後代目行と傳り出り目貴

目行と云ふありふら目貴と云ふ定り重しと云ふ重し
是の肉く柄とぬく一きぬく

二 師賢登
山之幸 ○金作りの小打刀と云ふ但小打刀とて寸尺の定り

同 持明院殿御幸
六波羅之幸 ○袴衣の下小腰巻と云ふ袴衣の下又ハ巻

糸等のり小腰巻と云ふ袴衣の下又ハ巻

平家物語に云ふに云ふたり

三 笠置軍
之幸 ○袴の沙籠入り日月と云ふ全服までおと付くく白日

小群く云ふはたりたる天子降の沙籠の事上右の云

ハ云ふは後醍醐の御付り始る是昔時代の書ハ始る

又をり又ハ書御度使下向の條も一云ハ中野親王

の百の條も一云ハ云ハ御付り始る

ハ云ふは袴の沙籠と云ふは全服までおと付くく白日

吹く全服までおと付くく白日の沙籠地ハ袴をりたる

そふも儀ありと云ふは全服の由度傳の家臣陽川

伝はあり先記紀州陽川伝はあり大儀のありり揚り

一 袴の沙籠の横形と云ふハ小古代降二幅長六尺

一寸あふくふ日月と全根少く打く符する日月のちて天照
皇を神八幡大菩薩春日大明神の神号を三行と云云
に横上二仁の但流を付く偏四つを大神少付之又柳松
海小舟軍北伊左衛門降の山無小月とあして初のと天
照を神八幡大菩薩糺大と全の文をふ打く付れ
り九八日小懸くきつめきたり是を名を禁め考くその大
板と知り色し物ふ流し抄小白流の事海伊流と云
是天子伊流こと又山名因幡の象なり付へらるる
之祖天子よりちされし流の伊流とり少物白流信
今ハ右クテ
五子と見え一丈幅一尺三寸五分横より上より八寸五分下り
日の丸を大サ径九寸像一分斗赤く幅と出し内山全根と

押たり其下六寸五分重く二ツ川あり大サともにあする白キ
不田寸五分重く下中々磨利なる天右八幡大菩薩た
電宿山権記三行に神名有り族長サ今存在するや
一丈元の何れと考しや切し夫し神と或人の足し其を
記しより右何とも白流とて白流あるを流の伊流と
いひ傳へしことと板にるふ前山云とく流の伊流と云
降をて仰り日月と全根少く打く付く事本或成也
流のことも其流其流強弱の時あり又相定も事相なる
事ありく時山降く少流と揚る流を付く白流小
日月と全根少く打く付く又全根の細工も調ふる付ハ
日月と二画くそれを揚の少流と名を付く揚りしを舟の

名と稱し傳て白族あれも今ふあうてきて海の沙族と
唱(来りしぬ)し物と海の沙族といふ物ハ海にありん
白族の事といふハ海にあり

又布書能は余合我余小痺本白くしちる本木の沙族
りりされかそ船の上より海の沙族と云ふこと
実ありといふ海の沙族の事ハ昔竹山く痺は白

草山く包しう山や

海の山に木の事ハ人多く知りたれども
昔の事ハかつかうさう多(海に)

○ 篋うつきと云ハ征矢の根又ハかりまことがり矢の根もなこの
而小篋の切口と云ふ本を伝そのしとくさる是篋とかりく
而之依(篋うつき)と云又まちともさくまちをさふーこり
うまくとしふる古物伝ふりけ事あり

○ 千檀板を渡の右のお川のぬとあひかかず具あり

○ 弦をハ渡の筋むる板咽腹を一面より漆草まで包むこ

○ 竹管ハヤナクこ 腹の事ハ腹の事古訓ヤナクこ

○ 金磁片ハさなひ核までおさるこニトウ之をハかした物と射碎く

(き)料の事

○ 弓矢ハ渡のさくみのと小者くわ川の清とあ合せて小をせを

然る今世の具きの川やまの伝といひもとくハ大なるれ

後之思とぬいし思は然る事あり

○ 弓の老ハ矢の根の深小者く川ハ古く之篋の口とまこ

六

関東大勢
上浴之事

○ 篋の事ハ竹と稱し馬小蹄は竹之古代ハ族とあり
よくおまの事ハ伝云謙伝あるの以より乳竹族と是竹の

宵より貞史抄のせし

○ 原信ハ為信ハ對して云信の原きと為きこの遠く又
大信ハ信とも云惣名ハ連着靴之

○ 顔顔の隆志意の事 倭名抄傳續教ノ条曰交顔志意
切顔教氏曰 胡結及天綱比
明云如字分和 詠言為文殊之孫極曰僧之有夾

花也 梅よりり信帛ヲ為又殊と云ハくし信之帛と云り
多く多く長く花信成深く多と解リハ糸のぬわぬ成

後セリシツメと訓 伊河名伊
河と云 又信之有変花と云ハ信花
形の折成波を信成ハ一夾ハ糸帛と相雜ル也交り並之と

有り其信のましと云並之 顔玉為信顔之字糸系ニ教多
謂整信ヲ條ヲ為文之唐顔之信之信顔之文信之と云り信と

ハハ折るも成之 顔顔 ユハタヒヨム古訓之 ユハタハ モハナガタ 信花形の器

信凡本抄小かしく本の中りしをいへし糸のありし
ハハ灰のぬもと 詠言 夾綱和名抄ニカウケナト讀字ニ音ニテニヒニタ和訓ナシ
俗ニキククトナトヨム事ハ非之ニ子書ニ顔ノ字ナリ

追考今ハ顔顔の深折絶をうす糸中の女房の仕立本小
顔顔の裳といふものなり並代ニ色々の糸を以花形極を

○ 八龍と金糸打付といふハ龍とハつ胃のよよを金糸
限の唐着の腰高とハ袷此之等の腰高限のら金

との付く唐きたる

○ 二あり帯とハ一ありと云きと云定帯二腰付

○ 信子の後め折小舟と金具小唐たる靴とハ金のらん金と

青貝のこき交々をさす

○ 白麿の根管とハ白麿と白く磨くハ磨と磨くハ
根管とハ根とハ管と依りたる

○ 牙徳友のろハ附介と云ニ有るハ一と附のり付と云
ハ一と云ハ山々系家の説（註）四友の附記ハ一
強ハ根管と云 志中扱とハ馬

少くハら扱ハ附とハ扱ハ一と附より上の方志中と持
くハ一と云ハ一と云ニハ一と云ハ一と云

○ 法具定とハ行ハ對して云々ハ右とハ左と云
と云ハ一と云ハ一と云ハ一と云ハ一と云

七 吉野城
軍之奉 ○ 就頭ノ曹ハ前立ハ就頭の政頭者と依り

○ 古く古代を曹の法といひ一忠の法と云名あり
世ハ一曹の法のありハ法と依り一忠と依り

○ 法と云曹の法やれども世忠の法ハ一甲なる
事あり一法ハ知れぬ法なるハ忠法といふとけせ

○ 新作の法依り

八 山後寄
京都奉 ○ 其の法ありありしハ人三守の在りき古
右の法ハ一法時代ハ一法と依り一法と依り

○ 同 四月三日合
戦之事 ○ 法も人ハ世深推ふと云ハ一法

○ 大立奉の膳高ハ忠と依り一法と依り

○ 記をみるハ 軍記考式
二七見エタリ

○ 膝遣を今脛楯イゲタテと云おへ 侍年の我の爪とハ

○ 吾後出来し一お成色し一翁脛楯といふ製あり 傍若
あり 翁位の爪と云ふは又言彼翁の爪と云ふは
くいたく 櫛子ふらふ人のいたくといふは又翁位の爪
と云ふは 翁の爪と云ふは 翁の爪と云ふは 翁の爪と云ふは
たふれ

○ 猪首ふさるとハかかると少しハかかあることと云ふ
矢石と云ふはぬき入るはぬき

○ かかると云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは
器シロトといふは成し

○ 胃の裏は胃の裏と云ふは 胃の裏と云ふは 胃の裏と云ふは

としその形を形あり

同 主上自令修 金輪法給事 ○ 笠の形といふ事は 笠の形といふ事は 笠の形といふ事は

かきしあるし一 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは

爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは

爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは

爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは

爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは 爪の爪と云ふは

時款を名^{ナリ}陽を以て去人と知り名うたは後よりそを
 必そ是を名の中を知りしもの但神不付とせ流る可や
 許さふと一山^ノの物と謂を推付家の物と用や
 夜多ありと以平言りれハ物物の感と兼りし
 東海を丸山と云り物物の感と兼りし
 一と云り言を以しと云名を以て月を以し
 成しく神不付成しと云一糸兼良云の物
 の能ハ衣裳ハ首の中一の言を以てありと云
 又云り
 九 轉攻○花^シ子の濃^シ糸^シ流^シる^シ言^シの事^シは
 少^シる^シ形^シと^シ減^シる^シと^シす^シ一^シ言^シは^シ流^シの^シ

流るるといふこと

- 葉糸の濃きは葉糸おとしなり全おまけくおとハある
 - 全おとしその物を尋たなりハ教多くおまけく
 - 吹返しハ胃の志^シ流^シ二三枚の流^シた^シを^シと^シ云^シは^シ流^シ
 - 全流りの糸鞘の右^シと^シい^シハ糸^シハ^シ形^シの^シ丸^シき^シ中^シを^シ流^シた
 - 一糸の事としりて糸と全流りしりて鞘とも一糸全
 - まく包こきると云あり鞘の形を多く削るなり
- 同 ^六攻^之糸^ヲ ○ 糸^ハ流^ハま^き流^ス糸^ハ削^ル
- 厚^シ流^シの^シ端^シを^シ削^ルと^シハ^シ脚^シの^シ丸^シき^シ中^シを^シ流^シ

○の形の形を金まのりしと申す

○右の形とハ渡の村向の方此は馬摺ゆききの馬と申す
條草と申す馬摺を明し行々条草を右のけと申す
系少くハ右の金ま引かろしければ一枚草少く申す
と申す馬摺付と申す

○白晝とさハはくちと申す

○節法ハ晝の取と申す
其く初にたふちと其の形のとく隣りてぬる右の形
この目の右より目まればぬる刻はぬるは隣り
くそのとく隣りてぬる

○鶴ハくひと隣り合付と申す

○二面度のりハ度と二面と申す

○眼の長くおたるとハ眼の折打と申す

○川に戰場いそと申す

○あふたり本竹会タレトウハ
ツグウタレス

○芝おとハ鞆の伝の湯と申す着ノスリヨモ
芝オト云同言

○雙口押サセトハ竹十二人我馬のたふち別たうと申す
系我も馬く依しと申す

○千鳥是ハ馬の足あとのと申す

十三 兵部御旨 ○ 刀ハ腰刀 一サヤニナ

○ 眼差の刀ハ後引合ふさしたる懐刃右代の眼差ハ及長サニ七寸
汚らなく新居る一ツのひき

こゝ程キ下迄と
竹かこし及とも云

○ 箱根竹下合戦事 ○ 曾の志 顔ハ挿してや云ハ田留の所まふ柳花と云

しそつろり

同 將軍御進發大渡 山崎寺合戦之事 ○ 大渡としハ唯その人ちある也 後も大なる

しそり

○ 柳子匠の曾ハかあとの後ささりの面と柳子の顔ハ併り

そつろり

○ 目の下の頬高ハ目の下より鼻順に下傳ふ頬高ハ顔高ハと云

才頬とも云 今うせきを面刺と云ハ此ハ面刺ハ顔高

かゝる

眼楯ハ後ハ右ハ眼楯ハ遠くを塞ぐ具也 古代の後ハ右の

眼と云々ハ仍多右眼ハ眼楯と云ふ也

仍前長刀ハ後前ハ此ハ後取の事也 仍前ハ仍前也

黄足ハしそり長刀也 仍前ハ

十五 三井寺合戦之事 ○ 陰竹所ハ始ハるはしそり也 上代ハ此後を

白汗としりハ後ハ白汗と云ふはしそり也 成ハ後ハ

合戦記ハ此後記るとしそり也 白汗ハ後三年合戦画

ハ白汗の形と画したり 其杯也 後ハ

此ハ白汗の形と云
くしてをくはしそり

同 正月十六日 合戦之事 ○ 中志の徳ハ此徳のよめ方を様ニ云ふ思く

どうと云

同系○養目うハ養目と云ける夫ハ養目ハ大なるもの
細き養目と云ふハ村々付志あり思ハ養目ハ
ぬと見養目と云ふ

○長形木の根ハ後方滋治の他

○新く木ハ皆花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
新く木ハ花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
根の方よりあり

○白樹ハ元為とハ右の方より左の方を花之出花ハ細き葉より花
新く木ハ花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
根の方よりあり

○花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
新く木ハ花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
根の方よりあり

○花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
新く木ハ花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
根の方よりあり

○花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
新く木ハ花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
根の方よりあり

○花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
新く木ハ花より先の方を花之出花ハ細き葉より花
根の方よりあり

同

新田殿淺川
合戦之事

○為合の淺我部の時不吾名なりと其別後三
年合戦の時かの曹ハおきしれし也かの物語不見し
古代淺多くハ草淺多り世傳ハ吾合少くはりきり
吾部と成しり之し之文の浅部傳りし以兼法絶と信
有り浅淺多く成しり之し

○鬼切鬼丸の石刀中兼制長伝詳あり

○熊井ハ唐刀と云く○馬系威の淺曹ハ馬系威之御守し
指の先より深なる小のハ深小の指の先と云れども

○右傳ふしそハおと抱りかししと云ふ事

○指もろ浅く云く○白木のろ是ハ丸木らりのぬきと

○し成屋し今世の木と竹と合をり白木らハ軍中

○西を流るるとはしハ之新れ換と云く古代軍ハ此

○木木のろと用ひし

○白木のろを白羽の羽

○百矢を矢櫃より百部入する用との事

○管籠ハ管籠のたるみとたのむは是之細き木小斜メハ溝

と彫り刻きてま小管と云く換と云く此ハ斜ハナリあり

形とハのさめ形とし之職人そ合合小通じそ我之

目成そお移りぬるゆめかあるゆりゆの月 右の觀文
田之名明

斜月

○黒草の淺ハ黒草と云く威を云く

○木枝曹ハ木枝と云く木枝ゆりく○木類ハ月の下此類之

○ 全作りの木刀は全作の斧ふ云たる沙所作の事と云はれぬハ
沙所作との全作の事

○ 岑の川の征矢ハ山岑の川尾より征矢と云はれ
そやと云はれぬハそやハ山岑の川尾より征矢と云はれぬハ

○ ありかりまゝと云はれぬハそやハ山岑の川尾より征矢と云はれぬハ
榎尾の木の木の征矢の根小用ハ山岑の川尾より征矢と云はれぬハ

○ 直矢と云はれぬハ
せれはハ二部より一つは伊勢小園と云はれぬハ

○ せれはハ二部より一つは伊勢小園と云はれぬハ
おとふふ系は山岑の川尾より征矢と云はれぬハ

○ 松原よりわしと云はれぬハ
強り分より一つは村ありしたる法のよと云はれぬハ

○ 漆と云はれぬハ
自上月還
○ 上帯ハ後の上帯の子細なり

○ 同
凡生判官
心替之事
○ 白布後輪の紐系は紐系威の後の拍板ハ

○ 同
くつは眼下神の冠ハ板多の隅の紐系は紐系威の後の拍板ハ

○ 同
ぬちと云はれぬハ
若一家の内ハ○ 後の神小用ハ山岑の川尾より征矢と云はれぬハ

○ 同
めけ後ハ後の神小用ハ山岑の川尾より征矢と云はれぬハ
たつと云はれぬハ

○ 同
書後ハ後の神小用ハ山岑の川尾より征矢と云はれぬハ
字おぬハ

十八 卷三 御之 杖のさうと杖の片く

○ 皆何の扇か 芭蕉の扇に古代軍扇として列す 仍事き
後て之扇ふりあり 今世軍者と云ふのふりあり
たる事ハあるき 古の扇に中古以来扇と云ふは 何れ
とて之扇ふせんとも 是くの扇後より

十九 新田義貞 越前府政事 ○ かい志のさの古刀ハ志のきに 扱と云は 志のさの

不かり 丸より 舟と漕ぐ かいと云ふのさのさ 平こが

因りつと云ふ 貝のさハ 綴りなるあり 摺カインレキ 鑄と書し

二十 義貞馬 扇後事 ○ 小具是ハ 後とハ 是れハ 小の 勝高 眼指 勝隆斗

是し たると云ふ 小具是と云 後ハ 小具 たるハ 是と云

事 勝隆ハ 用事 たる

同 義貞自 言之事 ○ 白羽の矢ふ 細あり

○ 志向のさのさハ 胃のさ 向はひ さいの 傍あり

三 細六師左 御門事 ○ 帽子 胃ハ 今世 深沢中と云ふ 之 行名 後ハ 委

○ 深ハ 今世 云 深 帷ふ

○ 大 後ハ 細あり 大云の 是ハ 後

○ セツ 相 詳あり 後ハ 記セし 七ツ 相とハ かに 遠 登き 後

○ 知ハ 序 是と云ふ ○ 全明ハ 任力ハ 士 後ハ 小 是 後ハ 相

なり 後ハ 相の 明の ことハ 法と云 明と云 何と云 けハ

後ハ 是と云ふ ことハ 後ハ 儒と云 何と云 包 たると云 包 相

云 神も 是 相も 是 何と云 何と云 何と云 何と云 何と云 何と云

何と云 何と云

○ 熊野舟の類高ハ紀州徳洲^ト似^ル物^ト也^ト一
一川柄小^ト薙ハ足舟の救^ク馬の三^カ段^ツ吹^クをさせ^ルと云^フ
ツネのたけ長キ

○ 深の^ハ浅^ハ草の^ハ淺^キも方^ク多^クゆれぬ^ル深^クの^ハ云^フ
を^シる^ハ馬^ノ淺^クと上^ニ古^ノ具^ノ装^トと^シて^一軍^ノ序^ヲ令^スス^ル
を^シる^ハ馬^ノ淺^クハ^ハ強^ク我^ノ用^也

同 義助朝臣 病死之^事 ○ 曼茶羅^ト書^ク淺^クけ^ト云^ハ無^キ也^ト也^ト
云^フ一^ノ加^シ一^ノ河^ノ前^ニ後^トと^シて^一中^ノ古^ノ代^ノの^ハ事^ト佛^ノ佐^ニ成^ス馬^ノ之^ヲ
信^セし^て女^ノわけ^のり^の世^の風^信

同 大館左馬助 討死之^事 ○ 緋^ノ系^ノ淺^クハ^ハ緋^ノ系^ノ成^ルり^也
空 任^ル吉^ノ合^ノ ○ 淺^クと^シ馬^ノの^ハ卒^スひ^ハ引^レ副^スと^シき^けいと^スと^ス

○ 淺^ク河^ノを^シる^ハ不^レ然^ナ始^ルと^シて^一説^{アリ}則^チ是^ノより^ハ紫^ノと^シ丹^ノ寺^ノ
合^テ我^ノ不^レ淺^ク也^トたり

廿七 左兵衛督 欲 誅^ス師^ト直^ト事^ト ○ 懐^ノ深^クと^シて^一方^ノ子^ノ申^ル朱^ノ割^レ若^ク他^ノ不^レ知^ル詳^ナ也^ト也^ト

廿六 四糸 繩^ノ手^ノ合^ノ ○ 臨^ノ遠^トと^シ令^ル小^ノ町^ノ遠^クた^ハ淺^クの^ハ語^ヲ令^ス也^ト

廿七 御所^ノ圖 ○ 小^ノ神^ノハ^ハ淺^クの^ハ名^{アリ}割^レ裂^ス詳^ナ

廿九 越後守^ノ自^ノ石^ノ ○ 江^ノ丹^ノ衣^ノ子^ノ御^也

○ 陶^ノ山^ノ川^ノの^ハ板^トと^シて^一上^ニ言^フ川^ノの^ハ板^ハ淺^クの^ハ後^ノ系^ヲ指^ス
同 小^ノ借^ノ水^ノ ○ 俗^ノ三^ノ船^トと^シ長^クサ^カ人^ノの^ハ淺^ク令^スと^シて^一ある^ハ小^ノ舟^ノと^シて^一
付^クる^ハ船^ノを^シる^ハ定^ル事^トナ^ラん^ト自^レ余^ノの^ハ勢^ヲ示^ス也^ト也^ト

同 松^ノ岡^ノ城^ノ周 ○ 淺^ク也^ト云^フ方^ノと^シて^一付^クる^事也^ト也^ト
○ 北^ノ能^ノハ^ハ禪^ノ家^ノ也^ト也^ト

同 直以下 ○ 折刀ハ今世の侍の衣大小の衣之類ハ左とハ侍

衣のり小深〜〜狭〜〜こ〜丈短き成用ひ〜

同 梶原云々 ○ 折刀あの一〜

三十五 武藏野 ○ 小の衣ハ今世小の衣化と云ぬ小の衣の侍

○ 四幅袴ハ布口幅と云く後之〜前後二幅〜之膝のあ〜

〜之の腰板〜羊の菊袋をけり〜其後ハ之後の腰袋

前〜後〜後小腰と云くお袋と後〜と〜おま〜後

あり〜後〜後〜お袋〜竹筒古ハ中〜少者〜

〜おま〜袴〜け〜幅袴化粧袴とも云中法〜高用抄小

〜及〜今世化粧〜と云〜の〜ぬ〜

○ 白〜子〜

○ 我眞胃の隈と云く○ 袖のこの板ハ〜夜目の板あり

○ 左り〜ける袴の板値あり〜

同 鎌倉合 ○ 袴袴と云く袴袴のよ〜

○ 関が笠うか〜明と云く明ハあ〜の全明の衣記す〜

○ 袴〜袴〜

○ 腰板あ小記を〜右の腰板を〜板〜

○ 袴〜袴〜

同 神南合 ○ 大袴形子細〜只大威〜

○ 福弓三〜たび〜廣ハ今世〜

○ 三川〜山〜の〜

〜〜

同 新地合 戦之事 ○三人法の精をふくむ侍代りの法をためた

りり、突ハ札のふと用へし、その法より感し、まき、法をた

めし、おろふ、法をいし、法をいし、ぬあ、小札とためし、まき

ためし、ハ様、みま、こり、法をいし、古ためし、こり、ハ突、まき、ぬけぬす、ためす、法代、ハ法、地、り、法、地

同 白山道智 上治之事 ○白鞍ハ法の境へし、

○法、策以下、こり、毛と法、し、と、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ

同 此馬の毛の法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

○この法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

○法、策の毛と法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

同 紀列諸門 山軍之事 ○法、策の毛と法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

○其中、法、策の毛と法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

○古、代、山、列、ハ、あ、し、煉、全、祥、目、百、あ、の、と、こ、小、列、ハ、慶、長、法、

○の、事、ハ、古、代、ハ、法、計、五、目、凡、全、ハ、通、用、の、法、策、ハ、不、用、し、

○法、策、ハ、古、代、ハ、法、計、五、目、凡、全、ハ、通、用、の、法、策、ハ、不、用、し、

同 二度 紀伊 國軍之事 ○法、策の毛と法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

○法、策の毛と法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

○法、策の毛と法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

○法、策の毛と法、法をいし、ぬあ、小札、法をいし、と、ぬあ、小札、法をいし、

世九北野通夜方發向事 ○貫か毛水口の事之盛之妻記より迄將軍の使ハ

然皮のつらぬき成るは自來ハ午皮としくとより

同北野通夜物語之事 ○本朝美この口と云ハ乃口の事よてハあしき盛

左地つきの信約を用ひし事朝美この口の朝をぬれ

本地と用ひし朝をこの口の朝口の腰刀の事之は入兵

えるし目せく

○本左の右のこく本刀のつらぬき信約を本地の朝を

用ひし

○信成義ハ信成の事之信成と云て是を帛と信成る義ハ

りしに叙爵促立位下ハ信成と云るハあしき事

○左地の尉あると云るハ公家信成義ヲたされてはる事

信成

記高倉宮之余長谷部信連の祠ニ考ル

○小具足前小具足細川相模守討死之事

○掃部卿と云く○口の腰刀と云る事信成の

人々世渡りしと云ハ信成の事之義と云くは信成

信成ふらつこれハ用ひ部 首とかくも信成と云る

ふけく

世九昔賀兵通軍事 ○鞍具足とハ鞍造具と云る事之鞍子の切

力平院おもむい尻ういむらうい腰帯等を鞍具足と云

○連弱鞍を信成のいのみし之義の事ハ信成の本字ハ連著

之定式式小と云り

○山形松法戸事 ○信成後ハ信成威

○白糸濱ハ白糸ノミ、成アリ子細アリ

早最勝講之時
及闘争之事

○眼指の左刀ハ南佐の左刀並く同

左刀とてくといふ所にして左刀とて右刀とて

衣の内小眼小さくともみしと眼指の左刀と

別小眼指の左刀ともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

今より子 懐才ハ眼指してともみしと眼指の左刀と

お月帯なまきいとうもめぬめ

うちあむり

衣指しつむせの

あつたぬらうせ

明和九年 壬辰六月

伊勢平藏貞文書



